

プログラム・ノート

越懸澤麻衣

「交響曲」はオーケストラのためのジャンルである。普通は数十人、場合によっては百人を超える大人数で演奏される。それをわずか数人の室内楽編成で演奏したら、何か物足りなく感じるのではないか——そう訝しく思われる方がいるとすれば、そうした予想はこの演奏会で、良い意味で裏切られることになるだろう。親密で濃密な室内楽による交響曲をぜひお楽しみいただきたい。

ベートーヴェン：交響曲第2番 ニ長調 作品36 (ピアノ三重奏用編曲)

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)は、1800年に満を持して交響曲第1番 作品21を発表すると、すぐに次の交響曲に取りかかった。1年半ほどで書き上げられた交響曲第2番 作品36は、1803年4月にアン・デア・ウィーン劇場で初演され、翌年にパート譜が、1808年にスコアが出版された。遠い調まで転調する序奏付きの第1楽章で始まったり、交響曲では初めてとなるスケルツォが第3楽章に置かれたりと、新しい試みが見られる作品である。

当時、交響曲が演奏される機会はそう多くはなかった。ましてや録音もない。実は、交響曲をオーケストラ編成で聴けたのはごく一握りの人々であった。たいていは家庭で編曲版を通して交響曲に親しんだのである。交響曲第2番も、七重奏版やピアノ連弾版など、さまざまな編成の編曲版が各地の出版社から続々と出版された。

今回演奏されるピアノ三重奏版は、初版も担当したウィーン的美術工芸社から1806年に出版されたものである。興味深いことに、そのタイトル・ページにはフランス語で「作曲者自身によってピアノ、ヴァイオリン、チェロのための三重奏に編曲された大交響曲」と記されている。そのため、長らく(編曲を好ましく思っていなかった)ベートーヴェンが自ら編曲した数少ない作品だと考えられてきた。ところが、彼の弟子で作曲家のフェルディナント・リース(1784～1838)は、「ベートーヴェンの作品には『作曲者自身の編曲』というタイトルで出版された作品がいくつもある」が、「それらの多くを編曲したのは私で、彼がそれに目を通したものである」と述べており、これもその一つではないかという見方が近年では有力だ。

ともあれ、このピアノ三重奏版は原曲に忠実に編曲されている。こうした編曲ではよくあるように、一度に複数の音を奏でられるピアノがさまざまなパートを担う部分が多いが、ヴァイオリンやチェロもずっとオリジナルの旋律を奏するのではなく、

ときに管楽器パートも担当する。オーケストラの演奏では埋もれがちな旋律がはっきり聴こえるところがあるのも、編曲版を聴く楽しみの一つだろう。

ショスタコーヴィチ(デレヴィアンコ 編曲):交響曲第15番 イ長調 作品141bis

(ピアノ三重奏と13の打楽器用編曲)

ドミトリー・ショスタコーヴィチ(1906～75)の交響曲第15番 作品141は、1971年、彼が65歳の誕生日を迎える直前の夏に、一気に書き上げられたと言われる作品である。翌1972年1月にモスクワで、作曲者の息子マクシム・ショスタコーヴィチ(1938～)の指揮で初演された。1926年、弱冠19歳で発表した交響曲第1番 作品10が大成功を収めて以降、生涯にわたって交響曲を書き続けたショスタコーヴィチの最後の交響曲である。ベートーヴェンの時代とは異なり、この交響曲はすぐに各地で演奏されるようになり、レコードやテレビ・ラジオ放送を通して聴かれるようになった。

この作品の大きな特徴は「引用」である。第1楽章が始まって比較的すぐ、唐突にジョアキーノ・ロッシーニ(1792～1868)の『ウィリアム・テル』序曲の旋律が出てくるので、聴く者を驚かせるだろう。一見、陽気な雰囲気だが、ほんとうにそうなのだろうか……。『ウィリアム・テル』は、ハプスブルク帝国の圧政下にあるスイスが、戦いの末、自由を手に入れる、というストーリーである。ショスタコーヴィチがソ連の芸術政策に翻弄され続けた作曲家であったことを考えると、そうした伏線を勘繰りたくもなる。また、フィナーレは「運命の動機」で始まる。リヒャルト・ワーグナー(1813～83)の『ヴァルキューレ』にある一節である。他にもいくつか引用があり、標題のない純器楽曲とはいえ、複層的な意味合いをはらんだ音楽といえよう。

この大編成のオーケストラのための交響曲をピアノ三重奏と打楽器という珍しい編成に編曲したのはヴィクトル・デレヴィアンコ(1937～)。旧ソ連出身で、1974年にイスラエルへ亡命したピアニスト・ピアノ教育者である。もともとこの曲は、グロッケンシュピールのソロから始まるという珍しい交響曲で、シロフォンや小太鼓、ウッドブロック、チェレスタなど13もの打楽器が活躍する。そうした原曲の特徴を活かしつつ、室内楽としてのスマートさも兼ね備えた編曲である。ショスタコーヴィチ本人もこの編曲を高く評価し、「作品141bis」と作品番号を与えたという。

(こしかげざわ まい・音楽学)